



The Happiest country バヌアツ



正直、普通の日本人はバヌアツってどこにあるのか知らない人が殆どです。一時帰国の時に郵便局から何か送ろうとすると局員さんから「バヌアツってどこですか？」と聞かれたことも一度や二度ではありません。



バヌアツは地図で言うとオーストラリアの東、ニューカレドニアとフィジーの間に位置します。ニューカレドニアといえば小説で「天国に一番近い島」というのが有名ですが、ここバヌアツはイギリスの nef というシンクタンクが The Happy Planet Index(HPI)なるものをランク付けし、バヌアツが「世界で一番幸せな国」として発表したことで知られています。そう言われて誰も悪い気はしませんが、その意味は化石燃料の使用率が低く、生活にストレスを感じない満足度が高いことが基礎になっています。それであればバヌアツが「世界で一番幸せな国」になっても不思議ではありません。



バヌアツのカスタムダンス。精霊信仰。

なにせ、人口23万弱のうち8割近くの国民が電気、ガスの無い日の出と共に起き、日の暮れと共に寝る生活を送っています。また、バヌアツには猿がいません。そのお陰か自然に育つ食料も豊富で果実やタロやヤム、サツマイモなどジャングルの恵を分かち合う生活を送っています。土着の精霊信仰を信じつつも近代になってから宣教師によって広められたキリスト教も信じるとってもピュアな人々です。首都と中核都市に住む4~5万人程度だけが化石燃料と輸入品に頼っています。

私が赴任した年に部族衝突が起きて緊急事態宣言が発令されたことがあります。事の発端は「呪いを掛けられた」とのことから若者同士の喧嘩となり、仕返しの際から相手の家を焼き討ちにして国中が大騒ぎになりました。そんな、プリミティブな生活のなかにも先端技術は浸透します。車も無い一年に一度しか物資を運ぶ船も来ない離島で、村のチーフが太陽電池を使ってDVDの上映会をしていました。内容はブルーベリー。最近では村で携帯電話だって使えます。通貨が必要になればなるほど貧富の差が生じ、土着の生活では食べていなかったお米やパンの輸入品を口にすると、それらなしではいられなくなる。便利な生活を誰も止めることは



村のお祭り。(マラクラ島)

出来ないでしょう。しかし、人間が純粋なだけに人が持っているものを見ると自分も欲しくなる。そのせいかここ数年の間に犯罪発生率は急増しています。バヌアツには物乞いや売春婦はいません。こうした純粋なバヌアツが、願わくは便利な生活も少しずつ味わいながら、貧富の差や争いごとの無い本当の意味で「世界で一番幸せな国」として未長く続くことを切に祈ります。(大町敏行)